

《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

——和歌を主題とする組香(五)——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介—和歌を主題とする組香(一)—(『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月)、(『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月)、(『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月)、(『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月)に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、射の巻から、五月雨香、時雨香、白菊香、夕暮香、水無月香、蓮葉香、花香の、七つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介(『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月)を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述している。本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに

矢野 環  
福田 智子

通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〴〵を付して丁数を記す。考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、(1) の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「\*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第46巻第3号)を参照されたい。

一、(2) で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2(角川書店、二〇〇三年)に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《射巻―四》五月雨香

【翻刻】

△(朱) 五月雨香

後水尾院御製之内

中和門院

五月雨は時雨村雨夕立のけしきを空につくしてそ見る

一 十炷香の札を用。

一 五月雨の香、三包、時雨・夕立・村雨の香、各二包充、都合九包聞香とす。五月雨の香斗り外に拵へ試に」射二オ出  
す。出香、皆焚終て後に、香包紙を開く也。

一 五月雨の香に一の札をうつ也。時雨・夕立・村雨には二・

三・ウの札を以て、無試十炷香の通りに札を打べし。

一 記録点は、客・地香の差別なく、皆一点充也。左に記す。」

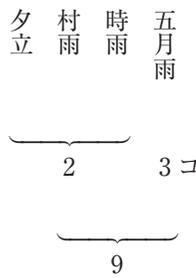
射二ウ

五月雨香記

〔表〕 射二オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「五月雨」の香(試香あり) 三包、「時雨」「夕立」「村雨」の香、各二包(試香なし)の計九包を用いる。すべて焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

答えには、十炷香札を用いる。「五月雨」の香には「一」の札を、また、試香のない「時雨」「夕立」「村雨」の香には、無試十炷香の要領で、出香の順に「二」「三」「ウ」の札を打つ。

\* 点は、客香・地香の区別なく、聞き当てるとすべて一点である。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭の中和門院の和歌は、皐月香(楽の巻49番目。『社会科学』第47巻第2号所収。)にも用いられているが、第二句に本文異同がある。すなわち、五月雨香で「村雨」とある箇所が、皐月香では「春雨」になっており、皐月香が、「春雨」を聞きの名

目とする一方、五月雨香は、「村雨」を香名とする。和歌本文の異同箇所が、このように、揃いの伝書の中で、別の組香に利用されている点には注意される。

なお、志野流五十組中の五月雨香には、歌がある場合もない場合もある。国文学研究資料館蔵『香道五十組巻之上』（ヤ8—54—5）は、「此香は古哥に 五月雨は春雨しくれ夕立の気色を空に交へてそふる」と云縁を取て組たる也」と記す一方、続けて「五月雨香一説」として挙げる組香では、歌を示さない。また、竹幽文庫所蔵の志野流の伝書には、「古歌に 村雨に時雨はる雨夕立のけしきをそらにまかふ五月雨」とある。当該歌に關しては、今後も引き続き調査をする必要がある。

《射巻一六》時雨香

【翻刻】

△（朱）時雨香

後拾遺和哥集

落葉如雨といふことをよめる

源 頼實

木葉ちる宿は聞わく事そなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

此哥に因て組たる香なり。

一 試なし。

一 十炷香の札を用ゆ。」射二四オ

一 時雨の香三包同香、木葉の香三包別々の香を、一包充用ゆ、都合六包を一炷充焚

出す。香終りて香銘を開く也。無試十炷香の通也。

一 札はいづれにても三枚揃たるものを時雨に打つ。又一炷充

違たるものを木葉として別札を打つべし。

一 記録、無試十炷香の通也。独聞は二点、二人より一点充也。

認様左に記す。」射二四ウ

時雨香之記

〔表〕 射二五オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

時雨	3	}	6
木葉	1×3		

\* 本香には、「時雨」の香を同香で三包、「木葉」の香を別香で三包の計六包を用い、一炷\*ずつ焚く。すべて焚き終わってから、正答を披露する。

答えには、十炷香札を用い、無試十炷香の通りに札を打つ\*。基本的には、一炷目には「二」の札を打ち、その後は、別香が出るたびに「二」「三」「ウ」の札を打っていく。結果として、三

枚揃った香が「時雨」の香であり、また、それ以外の、三種類の札を一枚ずつ打ったものが「木葉」の香である。

記録も、無試十炷香の要領で記す。独り聞きは二点、二人以上聞き当てたときは一点ずつである。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、『後拾遺集』に載る。

落葉如雨といふ心をよめる 源頼実

このはちるやどはききわくことぞなきしぐれするよもしぐれせぬよも 『後拾遺集』卷第六冬、三八二番

この歌は、『新撰朗詠集』『袋草紙』『今鏡』『題林愚抄』などにも載る、落葉を聴覚的に捉えた歌である。「時雨」の香三炷を一種類の香で統一し、「木葉」の香を別香三炷とするのは、一様の両音の中に、さまざまな「木葉」が散る音を「聞き分く」という趣向であらう。

《射巻一〇》白菊香

【翻刻】

△(朱) 白菊香

古今和歌集

凡河内躬恒

心あてに折らはやおらん初霜のおきまとはせるしら菊の花

此哥によりて組香となし侍る

一 十炷香の札を用ゆ。

一 白の香二包、菊の香一包、花の香二包、初の香二包、霜の香二包、都合九包出香とし、皆焚終て包紙を開べし。」射二四

オ 白の香、菊の香、花の香、外に拵へ試に出す。其餘は試なし。

一 札打様は

一 白に一の札 二枚 菊に二の札 一枚

花に三の札 二枚 初に花の札の札 二枚

霜にウ札 二枚

初の香、霜の香は、上下結たるを中りとす。又、初の一炷

斗り中たるも一点かくる。後の一炷斗中りたるは、中にあらず。」射二四ウ

一 聞数多くとも、菊の香不聞は手柄にあらず。外の聞すくなくとも菊を聞たる人、手柄にて、記録を興ふべし。

一 記録点は、菊の香、独聞三点、二人より二点充、其外は皆一点充也。独聞は増をかくるべし。初の香二包を、は、つ、

と分て認る。霜の香二包を、し・も・と分て記す也。猶、認  
 様左にて知るべし。」射二五オ

白菊香之記

〔表〕 射二五ウ

【考察】

(一) 竹幽本組香の方法

霜	2				
初	2				
花	2コ				
菊	1コ				
白	2コ				
		}			
		9			

\* 本香には、「白」の香二包、「菊」の香一包に、「花」「初」「霜」の香各二包の、計九包を用いる。すべて焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。本香の前に試香を行うのは、「白」「菊」「花」の香である。「初」「霜」の香には試香はないとするが、そうすると、札を打った後、答への読み換えが必要となる(後述)。

答えには、十炷香札を用いる。「白」の香には「一」の札、「二」「花」「月」のいずれでも可、「菊」の香には「二」の札、「花」「月」は「初」の香に用いるので、無印の「二」の札

のみ使用可)、「花」の香には「三」の札(「三」「花三」「月三」のいずれでも可)を打つ。また、「初」の香二炷には、「花二」「月二」の札を一枚ずつ打っていき、「霜」の香には「ウ」の札(「ウ」「花ウ」「月ウ」のいずれでも可)を打つと記されるが、「初」「霜」の香はいずれも試香がないため、両者の区別がつかない。答への読み換えも指示されていないことから推すと、あるいは、「初」の香に試香を認めるべきか。

本組香では、「菊」の香一炷を聞き当てるのが肝要である。褒美の香之記が与えられるのは、「菊」の香を聞き当てる者である。聞き当てる数が多くても、「菊」の香を聞き違えた場合には評価されない。

記録点は、「菊」の香の独り聞き三点、二人以上だと二点である。「白」「花」の香は一点ずつ、「初」「霜」の香は、それぞれ二炷あるうちの初の一炷(香之記には「初」の「は」、「霜」の「し」と表記)を聞き当てる点と一点であるが、後の一炷(香之記には「初」の「つ」、「霜」の「も」と表記)のみを聞き当てるも得点にならない。つまり、「初」「霜」の香は、初の香を聞き当てる上で、後の香を聞き当てることで得点になる「つがい当たり」である。なお、これら「菊」以外の香においても、独り聞きならば、さらに点数を加える。その場合に加算する点数は明記されないが、おそらく一点増しであろう。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、『古今集』に載る。

しらぎくの花をよめる 凡河内みつね

心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花  
『古今集』卷第五秋歌下、二七七番

この歌の主題「白菊」により、「菊」の香を「心あてに」聞き分けることを重視する。また、「初霜」を、「初」「霜」の香とし、さらに「は」「つ」「し」「も」に分けて、それぞれ二炷目を「つがい当たり」として「惑はせる」というのは、「白菊」が「初霜」の「白」に紛れる色彩の情景を、香に置き換えたものであろう。

《射巻―一二》夕暮香

【翻刻】

△(宋)夕暮香

三夕の歌は普く知る故載せず。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 寂蓮方三人、西行方三人、定家方三人と組合聞なり歌の作者の順にて如斯定し。人数九人を限るべし。

一 山の香、沢の香、浦の香、各一包充試に出す、楨立射二八才山の香寂蓮方、鴨立沢の香西行方、浦の管屋の香定家方、各一包充、都合六包聞香とし、皆焚終て後に、香包紙を開く也。

一 客香各外に拵へ置、地香の試終りて後に其組の香斗りを一組限りに試に焚出すべし。他組の客香二炷は試なし。

一 札打様左の通なり。射二八ウ

山の香に 一の札 沢の香に 二の札

浦の香に 三の札 我組客香に客の札 二枚打

他組客香 二炷に 客の札斗一枚打

一 記録は、山沢浦の香は、當り斗を記す。点なし。我客は一点、他客は二点充也。此或は他組の客香を聞中るを本意とすべし。

一 褒美記録左のことし。射二九オ

(客香)皆中 秋の夕暮と書

(地客)皆中 夕ぐれと書

客三炷中

又 夕ぐれの宿と書

(他客)一炷中

(我客)一炷外 宿と書

客三炷外 圈を画す

(客香)皆外 なかりけりと書

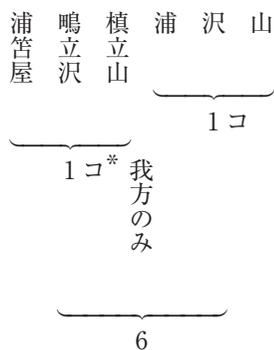
記録左のことし。』射二九ウ

夕ぐれ香記

〔表〕射三〇オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本組香は、寂蓮方、西行方、定家方に三人ずつ分かれ、九名で行う。席順もこの通りとする。

\*本香には、地香「山」「沢」「浦」の香と、「榎立山」の香（寂蓮方の客香）、「鳴立沢」の香（西行方の客香）、「浦の管屋」の香（定家方の客香）を各一包の計六包を用いる。地香の試香の後、「榎立山」「鳴立沢」「浦の管屋」の香については、それぞれ客香とする組の者だけが試香を行う。他の組の客香二炷については試香をしない。すべて焼き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

答えには、十炷香札を用いる。「山」「沢」「浦」の香には、それぞれ「一」「二」「三」の札を打ち、自分の組の客香には「客（ウ）」と「一」の二枚の札を、また、他の組の客香には「客」の札を一枚打つ。

記録は、「山」「沢」「浦」の香については、聞き当てた場合のみ香之記に記すが、聞き当てても得点はない。自分の組の客香を聞き当てれば一点、他の組の客香ならば二点である。つまり、試香のない二炷を聞き当てるのが肝要である。

褒美のことばとしては、皆ならば「秋の夕暮」、他の組の客香二炷を聞き当て、自分の組の客香を聞き外した場合は「夕ぐれ」、客香三炷を聞き当てた場合は「夕ぐれの宿」、他の組の客香を二炷とも聞き外し、自分の組の客香を聞き当てた場合は「宿」、客香三炷をともに聞き外した場合は「○」（圏）、すべて聞き外した場合は「なかりけり」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香が依拠する「三夕の歌」とは、周知のごとく、『新古今集』巻第四秋歌上に載る、連続した三首の歌である。

題しらず

寂蓮法師

さびしきはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕ぐれ  
(二六二)

西行法師

こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕  
暮 (三六二)

西行法師すすめて、百首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮  
(二六三)

香席では、これら三首の歌の作者に因んで三つの組に分かれ、席  
順も歌の配列に拠る。また、六つの香名も、「山」「楨立山」「沢」  
「鴨立沢」、「浦」「浦管屋」というように、三首から等しく採る。  
さらに、褒美のことばにも、三首に共通する「秋の夕暮」、寂蓮  
と定家の歌にある「なかりけり」が用いられるが、「夕ぐれの  
宿」については、おそらく次に挙げる伏見院の歌あたりが念頭  
にあったものであろう。

萩風を

伏見院御歌

ここにのみあはれやとまる秋かぜの萩のうへこすゆふぐれ  
のやど 『風雅集』 卷第五秋歌上、四九五番

《射巻―一四》水無月香

【翻刻】

△(朱) 水無月香

古今集

紀貫之

袖ひちて結ひし水の氷れるを春立けふの風やとくらん

後拾遺

源頼實

夏の日になるまで消ぬ冬氷春立風やよきて吹らむ

此哥によつて綴たる香也。

一 十炷香の札を用。射三ウ

一 雪の香、電の香、氷の香、各二包充、春風の香三包客香、都

合九包の内、地香一包取除け、残八包打交て焚出すべし。出

香皆焚終て後に、香包紙を開く也。

一 雪の香一の札、電の香二の札、氷の香三の札、春風の香ウの札を

打べし。

一 記録は、客香二点、地香は一点充也。客の間違、星一つな

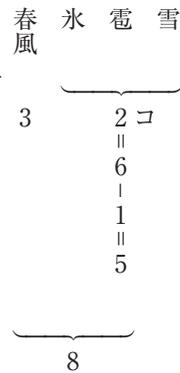
り。左のごとし。射三三オ

水無月香記 電除(朱)

〔表〕射三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「雪」「電」「氷」の香を各二包、客香「春風」の香を三包の計九包のうち、地香を一包除き、残りの八包を用いる。すべて焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

\* 答えには、十炷香札を用いる。「雪」「電」「氷」「春風」の香に、それぞれ「一」「二」「三」「ウ」の札を打つ。記録には、客香を聞き当てる点と二点、地香は一点ずつ記す。また、客香を聞き外した場合には、星を一つ付す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、それぞれ『古今集』『後拾遺集』に載る。

はるたちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくら

む

『古今集』巻第一春歌上、二番

氷むろをよめる

源頼実

なつのひになるまできえぬふゆごほり春たつ風やよきてふ  
きけん  
『後拾遺集』第三夏、二二一番

頼実の歌は、貫之歌を踏まえて詠まれたものである。立春の日、「春風」が「氷」を解かしているだろうかという貫之歌に対し、頼実は、夏でも氷が残る氷室では、「春風」は冬の「氷」を避けて吹いたのだろうと詠む。香名の「氷」「春風」は、右の二首の歌に拠り、「雪」「電」は、「氷」に並ぶ冬の景物として用いられたのであろう。客香「春風」の香を聞き外すと星が付くのは、頼実歌の下句「春たつ風やよきてふきけん」に拠る。本組香を「氷無月香」とする所以であらう。

《射巻一六》蓮葉香

【翻刻】

△ (朱) 蓮葉香

僧正遍昭

蓮葉の濁にしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

此哥の心を以て組侍る也。

一 十炷香の札を用。

一 一の香二包、二の香三包、三の香三包、都合八包の」射三六  
オ内、六包聞香とす。

一 二・三の香、外に拵へ試に出す。一の香は試なし。

一 一の香二包、二の香一包、三の香一包、以上四包交てはち  
すばと名付て焚出す<sup>三の香す、と心得べし</sup>。四包終て、残四包交合

て、其内二包取除け、残二包を焚出す。六包みな終りて包  
紙を開くべし。」射三六ウ

一 残二包の内、二の香を玉と名付、三の香を露と名付る。

出香は

玉露 露玉 玉玉 露露 如此の内、出るべし。

一 記録には、玉露ならは露玉と違て認る。露玉ならは玉露と  
認る。玉玉・露露は聞通り認べし。点は何人間にても一点

宛也。」射三七オ

蓮葉香之記 (朱) 二三除

〔表〕 射三七ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

初 後

一	2    2	
二	3    1 + 2	玉
三	3    1 + 2	露
	} 4 - 2    2	

\* 本香には、「二」の香(試香なし)を二包、「二」「三」の香  
(試香あり)を各三包の計八包のうち、二包を除き、六包を用い  
る。

まず、「二」の香二包と、「二」「三」の香各一包の計四包を取  
り出し、初段とする。それら無作為に交ぜ、一炷ずつ焚き出  
す。四炷焚き終わつたら、残りの四包(「二」「三」の香各二包)  
から二包を取り出して後段とする。以上の六包をすべて焚き終  
わつてから、香包紙を開き、正答を披露する。

答えには、\* 十炷香札を用い、「二」「二」「三」の香に、それぞ  
れ「一」「二」「三」の札を打つ\*。

記録では、「一」「二」「三」の香を次のように名付けて記す。  
すなわち、初段では、「二」の香二包を「は」、「二」の香を「ち」、  
「三」の香を「す」として、「は」「ち」「す」「は」とする。また、  
後段では、「二」の香ならば「玉」、「三」の香ならば「露」とす  
る。答えは、「玉露」、「露玉」、「玉玉」、「露露」の四通りが想定さ

れる。このうち、「玉露」の場合は「露玉」、「露玉」の場合は「玉露」と逆に記す。この操作により、聞き当てた数を数えるに誤りが生じやすいので注意を要する。

点は、聞き当てた人数に関わらず一点ずつである。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、『古今集』に載る。

はちすのつゆを見てよめる 僧正へんぜう

はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざ

むく 『古今集』卷第三夏歌、一六五番

記録の香名として、前段では「はちすは」が、また、後段では「玉」「露」が用いられる。前段の香名のうち、「はちすば」の濁音「ば」を清音「は」と合わせて、「は」の香を二包とするのは、第二句「濁りに染まぬ」に拠る発想か。また、後段で、「玉」「露」の香の組み合わせが出た場合、記録には「玉」「露」の順序を逆に記すことは、「なにかはつゆを玉とあざむく」という下句に拠るものと見られる。

《射巻一七》花香

【翻刻】

△(朱) 花香ハナカ

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三ウの香各三包宛、都合十二包交合て、二包除け、残十包聞香とし、二炷充一同に焚出す。十包皆終て包紙を開くべし。

一 地香各外に拵へ試に出す。

一 香組合并名目、左のごとし。射三八オ

一一(朱) 初春 一二(朱) 白雲 一三(朱) 下伏

二一(朱) 白雪 二二(朱) 如月 二三(朱) 横雲

三一(朱) 木蔭 三二(朱) 枝折 三三(朱) 弥生

一ウ(朱) 夕ぐれ 二ウ(朱) 尋花 三ウ(朱) 朝の花

ウウ(朱) 名香 ウ一(朱) 曙 ウ二(朱) 見花

ウ三(朱) 夕の花

一 記録は、客の交たるは二点、地香斗りは一点、各独聞は一点の増をかくる。射三八ウ二炷の内、一炷斗り聞たるは点なし。中りに立す。

一 聞香十炷の内に、ウ香の出数によつて、記録の末に哥を認る。左のごとし。

ウ香一炷出るは

古今集

桜花咲にけらしな足引の山のかいより見ゆる白雲

貫之

ウ香二炷出るは」射三九オ

千載集

おしなへて花の盛に成にけり山の端ことにかゝる白雲

西行

ウ香三炷出るは

古今集

みよしの、山邊に咲る桜花雪かとのみそあやまたれける

友則

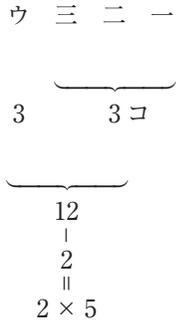
記録認様、末に顕す。」射三九ウ

花香記 一三除 (朱)

〔表〕 射四〇オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\*本香には、地香「一」「二」「三」の香（試香あり）と「ウ」の香（試香なし）各三包、計十二包を無作為に交ぜ、二包を除いて、残り十包について、二炷聞きを五回行う。十炷すべてを

焚き終わってから、香包紙を開き、正答を披露する。

答えには、十炷香札を用いる。記録には、二炷の香の組み合わせにより、「初春」以下、十六の聞きの名目を記す。

点数は、二炷ともに聞き当てることにより得られる。つまり、二炷のうち一炷のみを聞き当てても得点にならない。二炷中に客香が含まれる場合は二点、地香のみの場合は一となり、独り聞きでは、さらに一点を加える。

\*香之記の最後には、全十炷のうち、「ウ」の香が一炷ならば貫之の「桜花」歌、二炷ならば西行の「おしなへて」歌、三炷ならば友則の「みよしの、」歌を記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の香之記の最後に記す歌三首は、伝書に記された集付の通り、次のような歌集に見出される。

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

つらゆき

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

『古今集』卷第一春歌上、五九番

花歌とてよめる

円位法師

おしなべて花のさかりに成りにけり山のはごとにかかるし  
ら雲 『千載集』巻第一春歌上、六九番

寛平御時きさいの宮の歌合のうた ともりのり

三吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれけ  
る 『古今集』巻第一春歌上、六〇番

いずれも、山桜を詠んだ歌である。

さて、本組香の聞きの名目は、十六に及ぶ。右の三首の歌の中にも見られる、「白雲」「雪」「白雪」のような花の見立てとしての常套表現もあるが、他の名目もほぼ、歌に纏わる表現として類例を見出すことができる。以下、その代表的な例を、二炷の香の組み合わせとともに示す。

まず、同香二炷の場合の名目を挙げる。

①「初春」(一一)

初春待花

御製(後鳥羽院)

雪消えてけふより春をみよしの山も霞みて花を待ちける

『仙洞句題五十首』一番

②「如月」(一二)

花の歌あまたよみけるに

ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづきのころ  
『山家集』七七番

③「弥生」(一三)

はるのくれのうた

入道前太政大臣

白雲にまがへし花はあともなしやよひの月ぞそらにのこれ  
る 『新勅撰集』巻第二春歌下、一二四番

春という季節を順に、「初春」「如月」「弥生」と巡る。本組香における「花」が、まず春の花を対象とすることを示しているよう。なお、客香二炷の組み合わせ④「名香」「ウウ」は、「六十一種名香」でも知られる「名香」(すぐれた香、世に名高い香)として、別格に扱ったものであろうか。ちなみに、「六十一種名香」の中には、本組香に記される『古今集』友則歌にある「三吉野」も含まれる。

また、「ウ一」「一ウ」は、「曙」「夕ぐれ」で対をなす。

⑤「曙」(ウ一)

摂政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけほの

『新古今集』 卷第二春歌下、一一四番

⑥「夕ぐれ」(「ウ」)

山ざとにまかりて、よみ侍りける 能因法師

山ざとのはるの夕暮きて見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける  
『新古今集』 卷第二春歌下、一一六番

いずれも『新古今集』に用例を見出す。しかも、一首を隔てた位置に配されている歌であることから、あるいは、本組香が、直接この新古今歌二首に拠った可能性も指摘できようか。

次の「(三ウ)」「(ウ三)」も、「朝の花」「夕の花」の対になっている。

⑦「朝の花」(「三ウ」)

あさがほのはなにつけてつかはしける

栗田関白贈太政大臣

あさがほのあしたの花の露よりもあはれはかなきよにもふるかな  
『続古今集』 卷第十七雑歌上、一五七六番

⑧「夕の花」(「ウ三」)

春風

あすやいかにけふのながめもあかぬまのゆふべのはなはな  
たちぬなり  
『伏見院御集』 一八四番

⑦「あしたの花」の例は、『新編国歌大観』中唯一の例である。

栗田関白贈太政大臣」は、「七日関白」と呼ばれる藤原道兼(九六一〜九九五)。また、⑧の歌は、佐渡配流から赦免され帰京した京極為兼を迎え、乾元二年(一三〇三)閏四月二十九日、伏見院仙洞で催された『仙洞五十番歌合』一番歌である。「夕の花」の例は他にも数例が見出されるが、代表歌としてはこの伏見院の詠が指摘されよう。

同様に「(ウ二)」「(二ウ)」も、「見花」「尋花」で対をなすと見られる。

⑨「見花」(「ウ二」)

題不知

道命法師

春ごとにみるはななれどことしよりさきはじめたる心ちこそすれ  
『詞花集』 卷第一春、三三二番

⑩ 「尋花」〔二二ウ〕

尋花といふ心を

津守国助

まがふとはかつしりながら山桜雲をたづねてゆかぬ日ぞな

き

『新千載集』卷第一春歌上、七四番

さて、残り六つの名目であるが、〔二二〕〔二二ウ〕〔二三〕の

「白雲」「白雪」「横雲」〔⑪〕〔⑬〕と、〔三三〕〔三三ウ〕の

「下伏」「木蔭」「枝折」〔⑭〕〔⑯〕に大別されよう。本伝書に引

かれた三首の歌にも「白雲」「白雪」の語は見られたが、それらの名目を含めて、あらためて和歌の例を挙げる。

⑪ 「白雲」〔二二〕

法師にならむの心ありける人、やまとにまかりてほど

ひさしく侍りてのち、あひしりて侍りける人のもとよ

り、月ごろはいかにぞ花はさきにとりやといひて侍り

ければ

よみ人しらず

み吉野のよしのの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ

『後撰集』卷第三春下、一一七番

⑫ 「白雪」〔二二〕

雪の木にふりかかれるをよめる

素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく

『古今集』卷第一春歌上、六番

⑬ 「横雲」〔二三〕

建保三年五首歌合に、春山朝 後久我太政大臣

やま姫の霞の袖やにほふらし花にうつろふよこぐもの空

『続拾遺集』卷第一春歌上、六二番

⑪⑫は「花」の見立てで「白」という色彩が同じであり、また、

⑬は、⑪⑫とは詠みぶりが異なるが、⑪とは「雲」という点で共通する。

そして、山の「花」を主題とする名目が⑬～⑮である。

⑭ 「下伏」〔二三〕

題しらず

道命法師

よしの山花の下ぶし日数へて匂ひぞふかき袖の春風

『新後拾遺集』卷第二春歌下、八四番

⑮ 「木蔭」〔三三〕

為家卿家百首

春廿首

旅ねする花の木陰におどろけばゆめながらちる山ざくらか  
な 『壬二集』 一二五九番

⑩「枝折」〔三二〕

花歌とてよみ侍りける

西行法師

よしの山こぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をた  
づねん 『新古今集』 卷第一春歌上、八六番

本組香に掲げられた三首が、山桜を詠んだ歌であることとの関連性が指摘できよう。

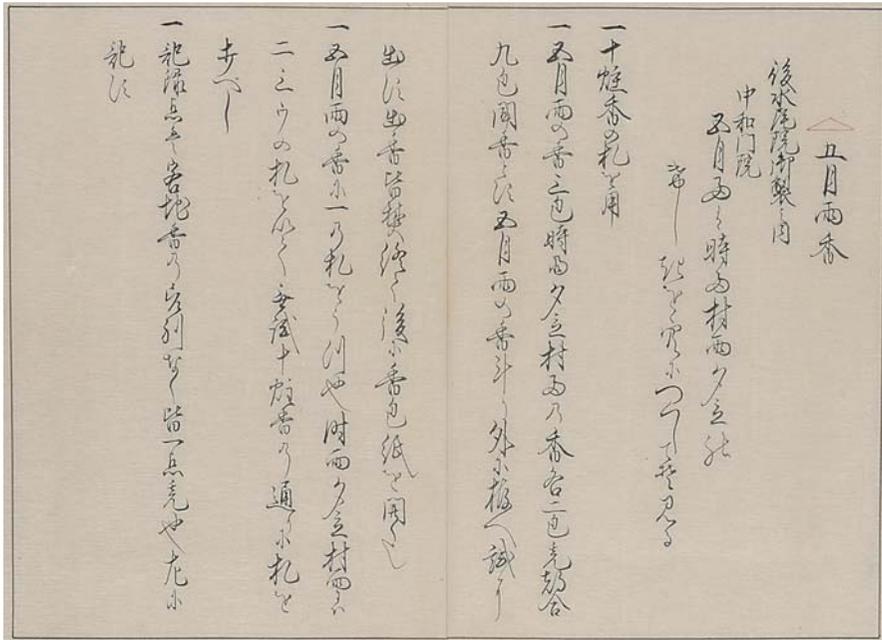
以上のように、本組香の聞きの名目は、出た香の組み合わせにより、ある程度、体系的に構成されていることがわかる。また、『新古今集』をはじめとする勅撰集歌が視野に入っていることは当然であるとしても、⑦の『続古今集』の道兼歌や、⑧の伏見院の詠のように、和歌表現としては稀な例を、聞きの名目として採り入れている点には注意される。本組香が、これらの歌に直接拠った可能性は高く、本組香成立時の和歌資料の流布と享受のあり方を考える上でも刮目すべきであろう。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベース

スの構築と日本文化の歴史的研究」(同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号16K00469、いずれも二〇一六〜二〇一八年度)における研究の一部である。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを二丁ずつ開いて撮影したもの。  
(射・一二丁裏)



(射・一二丁裏)

(射・一二丁表)

五月雨香記

本	初極	香柙	白菴	杜若	蒼竹
一	一	二	二	一	一
二	二	三	三	一	二
三	三	一	一	三	三
四	四	二	二	二	ウ
五	五	三	三	一	一
六	六	四	四	二	二
七	七	五	五	三	三
八	八	六	六	四	ウ
九	九	七	七	五	三
十	十	八	八	六	四

時雨香

源 頼實

後拾遺和字集  
落葉如雨の小川流るる

中家からる宿まゆり事なれば  
時雨ゆき夜も付ぬる夜常毛

正寄小園の細るる香なり

一試か

一十瓶香の札と月也

一晴ぬの春之色同香在家の春之色別々の昔々都人合  
二色一色毛和由一燈先焚出は香修香添と閑也香  
十瓶香の通也

一札いばれよも之致抄るるの紙時ぬ小方又二瓶  
毛遠るるの紙在葉一色毛和由と別札一色毛和由

一龍澤虫法十瓶香の通一色毛和由と二色二人より二点  
先と港後と一色毛和由

(射・一四丁表)

(射・一四丁裏)

時雨香之記

月	木	名木	名木	名木	名木	名木
	木	若竹	杜若	白後	香柳	初梅
一	木	一	一	一	一	一
二	時雨	二	二	一	二	二
三	晴ぬ	二	三	一	一	二
四	在家の	二	ウ	二	三	三
五	時雨	三	一	三	ウ	二
六	在家の	ウ	一	ウ	一	ウ
七	在家の	四点	一点	四点	一点	皆

(射・一五丁表)



夕暮香

一 十粒香の札と用也  
 一 一席蓮方之人 西乃方之人 定家方之人  
 組合せたり 寄の御書 定家 御書 人 数 九 人 之 限 紙  
 一 山の香 沢の香 浦の香 各一色 伊勢 松之  
 山の香 弟蓮方 略 三 沢の香 西乃方 浦の香 伊勢 各一色 定家 松之  
 香 寄 各一色 定家 松之 香 寄 皆 皆  
 紙 伊勢 香 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢  
 一 客番 各物 松 伊勢 香 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢 香 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢  
 の香 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢 香 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢  
 客番 二 紙 伊勢 紙 伊勢 用 伊勢  
 一 札 女 松 友 之 通 伊勢

(射・二八丁表)

(射・二八丁裏)

山の香 一の札 沢の香 二の札  
 浦の香 三の札 我組香 一の札 二枚  
 他組香 二枚 客の札 一枚  
 一 記録の山 沢 浦の香 各一色 高 汁 之 紙 以 馬 之 我  
 客 一 点 他 客 の 二 馬 亮 也 此 式 之 他 組 の 客 香 紙  
 國中 之 紙 本 名 之 紙  
 一 廣 災 記 録 之 紙

客香 皆中 秋の夕客 書  
 他客 二 紙 中 夕客 書  
 我客 外 夕客 書  
 客 三 紙 中 夕客 書  
 他客 一 紙 中 夕客 書  
 我客 中 夕客 書  
 客 二 紙 外 宿 書  
 客 三 紙 外 圖 之 紙  
 他客 皆 外 夕客 書  
 記録 之 紙

(射・二九丁表)

(射・二九丁裏)







